砂漠の国の最恐姫

アラビアン後宮の仮寵姫と眠れぬ冷徹皇子

秦朱音　Akane Hata

アルファポリス文庫

https://www.alphapolis.co.jp/

登場人物紹介

【今世】

リズワナ・ハイヤート
豪商の末娘。前世のアディラ・シュルバジーとしての記憶を持っている。

アーキル・アル＝ラシード
不眠の呪いに苦しむアザリムの皇子。戦場での非情な振る舞いから、冷徹皇子と呼ばれる。

ルサード
リズワナが飼っている白猫。月を見ると白獅子の姿に変わる。

カシム・タッバール
アーキルの従者。右胸に獅子の痣がある。

ファイルーズ
ナセルの王女で、アーキルの第一妃。

【前世】

アディラ・シュルバジー
アザルヤード皇帝に仕える女戦士。リズワナの前世。

ナジル・サーダ
アザルヤードの第三宰相。アディラと共に皇帝に忠誠を誓った文官。

イシャーク・アザルヤード
アザルヤード帝国の皇帝。

ファティマ皇妃
イシャークの妃。

第一章　私はランプの魔人ではありません！

「お父様！　今夜バラシュにいらっしゃるのが、皇子様御一行だっていうのは本当ですか？」

いつにもまして高く弾んだザフラお姉様の声が、窓の外から響いてくる。一体なんの騒ぎだろうかと、私は二階にある私の部屋の窓の側で様子をうかがった。

「……ザフラ！　そんな大声で言うものではない！　誰かに話を聞かれて、皇子様が命を狙われでもしたらどうする気だ！」

「えっ、でもぉ」

お父様に叱られたお姉様は、下を向いてもぞもぞとドレスの裾を揺らした。

聞けば、皇子が都からわざわざここ辺境バラシュの街まで、狩りをするためにやってくるそうだ。御一行は、バラシュから隣国ナセルに繋がる砂漠の手前に天幕を張り、しばらく滞在するらしい。

何もない灼熱（しゃくねつ）の砂漠で、皇子たちは一体何を狩るというのだろう。

不思議に思いながら、私は膝の上に寝そべった愛猫ルサードの背中を撫でた。
「我がハイヤート家は皇子様のお世話を仰せつかっている。街の者には彼らが皇族であることを絶対に知られるな。ザフラ、お前が御一行のお世話をするんだ。皇子様に見初められでもしたら、これほどの幸運はないぞ」
「本当ですね、お父様！　私、皇子様に見初められるように頑張ります！」
誰かに話を聞かれることを心配していたはずなのに、お父様とザフラお姉様はやけに大声だ。私は呆れて窓辺に頬杖をついた。
「ザフラお姉様ったら、大声を出すなと言われたばかりなのに。それに、相手が皇子様だとしても、見ず知らずの方の妻になって幸せになれると思ってるのかしら？」
ついつい漏れた私の心の声に返事をするように、膝の上のルサードが「にゃあ」と鳴いた。
私――リズワナ・ハイヤートは、砂漠の国アザリムの商人の末娘だ。
父は隣国ナセルとの交易で財を成したいわゆる成金で、アザリムとナセル両国の王族からも名を知られるほどの豪商。
この国の慣習に従って四人の妻を娶り、私はその四人目の妻の子として生まれた。
しかし、理由あって、私は腹違いの姉たちからひどく嫌われている。
少しでも姉たちに近寄ると獣を見るかのような目で蔑まれるので、いつしか私は

自分の部屋に引きこもってひっそりと暮らすようになった。
姉たちと顔さえ合わせなければ割と平和に暮らせるし、山ほどの財産を持つ我がハイヤート家では、何もせずに引きこもっていてもお金に不自由することはない。
時折、お母様が今も生きていてくれたら……と思うことはあるけれど、姉たちとの面倒ないざこざに巻きこまれるよりは、引きこもり生活のほうがずっといい。
幸い、私には愛猫のルサードという友人もいるから、日々退屈することはないのだ。
ここアザリムは剣の国、隣国ナセルは魔法の国と言われている。
アザリムの中でも砂漠に近いこのバラシュの街はナセルとの交易で成り立っていて、毎朝街中で開かれている市場には、ナセルから取り寄せた珍しい魔道具がいつも所狭しと並ぶ。
実はこの魔道具の大半は、父がナセル商人から仕入れているものだ。
儲けることしか頭にない根っからの商人である父は、ナセルの隊商との商談の場に、必ずと言っていいほど私を同席させる。
何を隠そうこの私、面紗の下の素顔を見た者が口を揃えて、「まるで神話の女神ハワリーンの生まれ変わりのように美しい」と大騒ぎするほどの美女なのである。
絹のような滑らかな肌に、宝石のごとく輝く瞳。
すらっと伸びた腕は、ランプさえ持てないのではと心配されるほど細く、華奢な体

つきは世の男性の庇護欲を刺激するらしい。
そんな私の容姿を一目見ただけで、父の取引先であるナセルの商人たちは目を輝かせて骨抜きになる。こちらが何も言わなくたって、次々と父に有利な条件を提示してくれるというわけだ。
もちろん、タダではない。
父に有利な取引条件を提示する代わりに、私を妻に迎えたいと申し出てくるナセル商人も少なくなかった。
しかし商売に役立つ駒である私を、父が易々と手放すわけがない。商売上どうしても断れない縁談には、私ではなく姉たちを嫁がせていった。
まるで生贄のように嫁がされる姉たちが私を恨んでいびり倒すのも、仕方のない話だ。
これが砂漠の国アザリムの端っこに暮らす、私――リズワナ・ハイヤートの日常。
でも、皆が考えていることと、真実はちょっと違う。
本当の私は、決して女神ハワリーンの生まれ変わりなどではない。
実は私の頭の中には、前世の記憶が残っている。
私の前世は数百年前、アザリムがまだアザルヤードと呼ばれていた昔に、この地で生きた一人の女性。史上最恐と言われる、女戦士アディラ・シュルバジーなのだ。

（まさか、華奢で繊細なこの私が、歴史に名を残すあの最恐女戦士の生まれ変わりなんて……誰も想像できないだろうけど）
ルサードの背中を撫でる私の手は細くて白くて、傷一つ付いていない。アディラとして生きていた頃には考えられなかったほど、綺麗な手だ。
前世の私アディラは、女戦士として大陸中の戦地を回り、隣国との激しい戦いに身を投じていた。
すべては祖国を守るため、主君である皇帝陛下を守るため。
そして、愛した人を守るため。
戦いが終わっていつか平和な世が訪れたら、ずっと想いを寄せていた相手に自分の気持ちを告げるつもりでいた。
前世の私が愛した相手の名は、ナジル・サーダといった。
武官の私とは正反対の穏やかな彼は、若くして国の宰相を務める逸材だった。私と彼は主君であるイシャーク・アザルヤード皇帝陛下に忠誠を誓い、イシャーク陛下を守るために共に奮闘した。
私は戦地で、ナジルは都で。離れた場所にいても、お互いを信頼し、それぞれの守るべきものを命がけで守る。それが私とナジルの間の約束。
いつしかその約束は私たち二人の絆となり、そして私の心の中では、その絆は愛情

に変わっていった。
しかしナジルのほうは、私と同じようには想ってくれなかったようだ。
すべての戦いが終わってアザルヤードの都に戻った私を待っていたのは、ナジルが別の女性と結婚する、という報せだった。
ナジルは、それが私にとって残酷な言葉になるとも知らず、幸せそうな顔で言った。
『ずっと愛していた人が、やっと私の妻になってくれるんだ』と。
聞けば彼の結婚相手の女性は、優しくて穏やかで、守ってあげたくなるような儚げな女性。戦いでボロボロになった傷だらけの私の、対極にいるような人だった。
私は自分の恋心を抑えつけ、最愛の相手の幸せを祝福した。
でも、心は苦しかった。
『もしも生まれ変わってまたあなたに出会えたら、来世こそあなたの妻になりたい――』
戦勝を祝う船上の宴で海を見ながら一人、そう呟いたところまでは覚えている。
しかし、私のアディラ・シュルバジーとしての記憶は、それが最後だ。
前世の私がその後どんな人生を送ったのか、どんな風に死を迎えたのか。今の私はもう覚えていない。
ただ、もう一度生まれ変わったら今度こそ、愛する人と結ばれたい――そう強く

願ったアディラとしての気持ちだけは、今の私の心にもしっかりと刻まれている。
（だから、見ず知らずの相手と結婚するなんて、私には考えられないわ）
「にゃん！」
前世に想いを馳せて呆けていた私が手を緩めた瞬間、ルサードがひょいっと私の腕から飛び出した。
「ルサード！　どこに行くの？」
「みゃあぁ」
窓の外に飛び出したルサードは、壁のくぼみを伝って器用に地面に下りていく。しっぽをフリフリ、呑気にお散歩に出かけるようだ。
「もう……！　今日は大人しくしておかないと駄目だと言ったのに」
よりによって都から皇子様がやってくる日に外出するなんて、面倒ごとに巻きこまれる予感しかしない。
私は棚の上にあった面紗を急いで身に付けると、もう一度窓から身を乗り出して、左右をキョロキョロと見渡した。
お父様もお姉様もすでに屋敷の中に戻った後のようで、目の届く範囲には誰もいない。
（今なら、誰にも見つからずに近道できそう）

私は窓枠に飛び乗ると、両手を振ってその場で勢いを付けた。

「はっ！」

小さく息を吐いて、二階から地面に飛び下りる。空色のシフォンドレスの裾が風にふんわりと揺れ、私は音もなく地面に着地した。

華奢で繊細な儚げ美女というのは、世を欺くための仮の姿。

お父様もお姉様も知らないけれど、本当の私は自分でも驚くほどの怪力の持ち主で、おまけに剣術にも長けている。

誰かに剣術を習ったこともなく、特別な訓練を受けたわけでもない。

物心ついた時にはすでにこの力を身に付けていたから、きっと私は前世の記憶だけではなく、能力まで受け継いだのだろう。

二階から飛び下りることなんて朝飯前だ。普通に生活していても、少し気を抜くとついついこの怪力を使ってしまいそうになる。

もしも今の私の力を誰かに知られたら、今世でも最恐の称号を手に入れてしまうのでは……？　なんて思うこともしばしば。

だから今世の私は、この力をひた隠しにして生きている。

それに、心の奥底に息づくアディラとしての私が願うのは、前世で愛したナジル・サーダにもう一度出会って結ばれることだ。そのためには、前世の彼の婚約者がそう

であったように、か弱くて儚げな女でいようと決めた。

女神ハワリーンの生まれ変わりであるかのように自分を偽り、強さを隠してでも。

アザリムに古くから伝わる神話の中に、人は数百年ごとに生まれ変わって再び出会う、という記述がある。今自分が出会っている人はすべて、前世でも関わりのあった人なのだという。

その神話を信じるならば、きっとナジル・サーダも今、この世界のどこかで生きている。もう出会っているかもしれないし、これから出会うのかもしれない。

彼が私と同じように前世の記憶を持っているとは限らない。しかし神話によると、何か一つは必ず、前世の自分が持っていたものを引き継いで生まれ変わるのだとか。

もしも奇跡的に彼に出会えたら、前世では伝えられなかった恋心を、今度こそ伝えたいと思う。

私が前世から引き継いだものが「アディラとしての記憶」だったのは、叶わなかった恋を来世で成就させたいという、アディラの強い気持ちの表れだと思うからだ。

（……って、そんなことはさて置き、ルサードはどっちに行ったのかしら？）

立ち上がって辺りを見回すと、ルサードはしっぽを振りながら建物の向こうの角を曲がっていくところだった。

「ルサード、待って！」

ドレスの裾をたくし上げ、私は急いでルサードの後を追う。ルサードにあの角を曲がられてしまえば、きっと彼の姿を見失ってしまうだろう。

しかしちょうど建物の角まできたその時、お父様と見知らぬ男が身を寄せて話をしているのが目に入った。私は二人に見つからないよう慌てて一歩うしろに下がると、壁の陰に身を隠す。

（わあ、危なかった。全力で走るのを見られるところだったわ）

胸に両手を当てて、音を立てないように細く息を吐く。

私は華奢で繊細、か弱くて絶対に走ったりしない儚げな女……そう何度も自分に言い聞かせながら、お父様たちに見つからないように背中を壁にぴったりと付けた。

建物の向こうのほうから、ルサードの「みゃあん」という勝ち誇った声が聞こえる。私につかまらないよう、わざとお父様の近くに歩いていったのだろう。後でみっちりお説教をしなければいけない。

私がすぐ側にいることに気が付かないまま、お父様は低く小さな声で見知らぬ男に囁いた。

「……それで、手に入るのか？」

「いやぁ、ハイヤート様。さすがにそれは難しいですよ」

「そこをなんとか。我がハイヤート家の命運がかかっているのだ。二千スークは払うが、どうだろう」

「ううむ、探してはみますが、いかんせんすぐに見つかるような代物ではなく……」

（なんの話？　おかしな取引の相談でもしているのかしら）

壁の陰からそっと覗いてみると、ターバンとひげでほとんど顔の見えない初老の男がお父様の隣で項垂れていた。

そのさらに向こうのほうで、ルサードは屋敷の塀に登り、その上をテテッと軽やかに走っていく。

（あの子、屋敷の外に出る気なのね）

ルサードは豪商のお父様が買ってきた隣国ナセルの猫で、ここアザリムでは高値で取引される珍種だ。誰かに捕まって売り飛ばされでもしたら大変なことになってしまう。

お父様たちに見つからないようにルサードに追いつくには、どうやら屋根を伝っていくしかなさそうだ。

私は背にしていた壁のくぼみに手をかけて、一息に屋根の上までよじ登った。

「――今晩宴を催すんだが、これまでとは比べられないほど重要な客なんだ。宴の後、客が天幕に戻られるまでには準備をしておきたい」

「今晩までというと、納期まであと半日しかないじゃないですか！　いくらナセル商

人で最も顔が広いと言われる私でも、そんな短期間で魔法のランプを手に入れられるわけがない……ん？」

お父様と話していた見知らぬ男は、困った顔のまま天を仰いだ。

……そう。天を、仰いでしまった。

屋根の上にいた私と、見知らぬ初老の男。

私たちの視線がバッチリと合い、お互いにそのままの姿勢で固まった。

「……ハイヤート様」

「なんだ？　二千で駄目なら三千スークでどうだろう。いや、言い値でいい。いくらが希望だ？」

「お代は結構です。もしも今晩までにご要望の魔法のランプをお持ちできたら……あの屋根の上にいらっしゃる女神（ハワリーン）を私の妻としていただけませんか」

「は？　屋根の上？」

お父様は怪訝な顔で、男と同じ方向――つまり、屋根の上にいる私を見上げた。

（うう、なんと言い訳したらいいんだろう）

体が弱くて部屋に引きこもってばかりの娘が、よりにもよって屋根の上で一人、威風堂々と立っているのだ。

こんな高いところにどうやって登ったのかと聞かれても、上手くごまかせる気がし

ない。

「リ、リズワナ？」

「……はい、お父様。残念ながらリズワナです」

「お前、なぜそんなところに？　どうやって登った⁉」

「え？　それはその……あっ、今日は風が強かったので吹き飛ばされたのかも。ほら私、華奢（きゃしゃ）で儚（はかな）いので」

……ああ、失敗した。

こんなおかしな言い訳が通じるわけがない。

「……なるほど。リズワナ、窓は不用意に開けるものではないぞ。今晩から、こちらのジャマール殿の妻となる大切な体だ」

（ほっ、なんとかお父様を騙せたわ……って、私がこの男の妻に⁉）

若く見積もっても私の三倍は生きていそうな初老の男は、私の顔を見上げて「うんうん」と頷いている。

「お父様！　私はとても体が弱いですし、まだ十八歳の若輩者です」

「ああ、女神（ハワリーン）よ！　うちにはすでに三人の妻がいる。若いあなたのこともきちんと指導してくれるはずだ。安心して私に嫁いできてほしい」

「ええっ？　私、四人目の妻なんですか？」

とんでもないことになった。
愛する人と結ばれるという前世の願いを叶えたいがゆえに、私はわざわざ華奢(きゃしゃ)で儚(はかな)くてか弱いフリをしながら、十八年もひっそりと自分を隠して生きてきたのだ。
それなのに、突然こんな年の離れた見知らぬ相手に嫁ぐことになるなんて、絶対にお断りしたい！
（とりあえず、この場から逃げよう）
「――あああっ！　お父様、ジャマール様！　あちらから竜巻が来ますっ‼　風神ハヤルがお怒りなんだわ！」
私が大声で遠くを指差すと、お父様とジャマールはつられて私の指した先を見るため背中を向けた。
（さあ、今のうち。とりあえずこの場から逃げるわよ！）
私は屋根の上を全力で走り抜け、愛猫ルサードが向かった先――バラシュの街の方角へ急いだ。

◇

異国の珍しい果実や香辛料、香油、装飾の施された骨董品。

通りの両側にずらっと並ぶ露店の隙間を縫(ぬ)うように、猫のルサードは軽やかに駆けていく。
私はルサードの姿を見失わないように、人の間をすり抜けながら石畳(いしだたみ)を進んだ。
（それにしても、今日もバラシュの街は平和ね）
街の人々だけでなく荷を運ぶロバまでが自由に往来しているこの通りは活気に溢れていて、あちこちで人々の明るい笑い声が湧き上がっている。
しかし一見平和なこの街は、つい数年前までピリピリとした緊張感に包まれていた。隣国ナセルとの関係が悪化し、戦場からも近かったこの街は、いつ両国の戦に巻きこまれてもおかしくない状態だったのだ。
その頃を思うと、今のこの市場(バザール)の明るい賑わいは嘘のよう。
両国の国境に近いこのバラシュの街がここまで再興したのはすべて、アザリムの第一皇子アーキル・アル＝ラシードの功績だと言われている。何年も両国の力が拮抗(きっこう)していたところにアーキルが成人して参戦すると、あっという間にナセル軍を倒して制圧してしまったそうだ。
（なんでも、アーキル皇子が自ら兵を次々に斬り殺し、一夜で血の海を作ったとか……ああ、怖い怖い！）
昼夜問わず戦い続けるアーキル軍の陣営はまるで不夜城のようだったと、ナセルの

商人から聞いたことがある。

戦地での功績は、とかく大げさに語られがちだ。アーキルの武功の噂だって、真実かどうかなんて分からない。しかし、彼が冷酷で残虐な人物であることは間違いないだろう。

「そんな恐ろしい人が来るとも知らず、バラシュの人たちはみんな呑気ね……。あっ、ルサード！　見つけたわ！」

市場の裏、細い路地に入っていくルサードが、私の視界を横切った。見失わないように目を見開いて、私は露店の間を抜けてその路地に飛びこむ。

「ルサード、どこにいるの？」

誰もいない路地を、そろそろと進む。

陽の光が石壁に遮られた一本道の路地は、昼間にもかかわらず薄暗い。

ここまで来ると市場の賑わいはほとんど聞こえず、目の前の細い路地はどこまでも続いているように見える。

（もしかして、この道じゃなかったのかしら）

ルサードとは別の道を来てしまったのかもしれない。このまま進むのを諦め、私は市場に戻ろうと足を止めた。

――すると、その時。

歩いてきた方向に振り返ると、私の体が何かにぶつかった。

「きゃあっ！」

目の前には、大柄で人相の悪い一人の男が立っていた。ルサードを捜すことに気を取られて、人の気配に気が付かなかったとは情けない。男はゴツゴツした手で私の口を覆うと、腕を掴んでそのまま石壁に背中を押し付ける。

（物盗りかしら……それとも？）

「お前、可愛い顔をしてるじゃないか。俺と一緒に来てもらおう」

なるほど、これはきっと物盗りではなく人買いの類だ。

私を都まで連れていって、後宮の奴隷として売るつもりだろう。

（ああ、私ったら華奢で儚い女のはずなのに……こんなところで本性を明かさなければいけないなんてね）

この男には、私に手を出したことを後悔してほしい。

もちろん、あの世でね。

私は人買いの男と目を合わせたまま、彼の腰にぶら下げてあった短剣を右足でひょいっと蹴り上げる。

不意をつかれて驚いた男の腹に蹴りを一発喰らわせ、なぎ倒す。するとその勢いで、男の体が音を立てて割れた地面にめりこんだ。

私は宙に浮いた短剣（ダガー）を右手で取ると、男の背中に腰かけて、首筋にそれを当てた。
「あなた、誰か他に仲間はいらっしゃるの？」
うつ伏せに倒された大男からは、返事がない。
「このバラシュの街は、とっても治安がいい場所なんです。あなたの仲間はどちらにいるのかしら。暴れられる前に根こそぎ殺（や）っておく必要がありますから教えてください」
やはり、返事はない。
「あれ？　どうしました？　致命傷ではないはずなんだけど……おーい」
座っていた背中から降りて、男の前髪を掴んで顔を上げさせる。するとその男の口からではなく、私の背後の方向から別の男の声がした。
「無駄だ。気を失っている」
「え？」
振り向くと、そこには白い長衣（カフタン）をまとった男性が二人立っていた。口元まで隠すようにターバンを被っているので顔はほとんど見えない。
私も慌てて自分の面紗（めんしゃ）を整え、できるだけ彼らに顔を見せないようにうつむいた。
（どう考えても、私がこの人買いの男を伸（の）したところを見られたわよね）
後から現れたこの二人も、バラシュの人間ではなさそうだ。人買いの仲間なのか、

それとも別の街から来た旅人か。
いずれにしても、急いでルサードを捜しに行きたい今、この人たちと深く関わるのは面倒だ。とりあえず、この場をごまかすために一芝居打とう。
「こっ、怖かったですぅ……助けてくださってありがとうございましたっ！」
「いや、俺たちは何もしていない。お前がその男を蹴（け）り倒したように見えたが？」
（……あ、はい。やっぱり騙されませんよね）
手前に立って話す男の瞳は、印象的な瑠璃（るり）色。口調は偉そうな上に冷たいが、人買いの仲間ではなさそうだ。
ということは、後ろにいる優男も害はないだろう。ターバンの隙間から覗く優男の目は穏やかで、女を捕まえて奴隷として売り飛ばそうなんていう緊迫した気配は感じられない。
私はその場に短剣（ダガー）を投げ捨て、間に合わせの笑顔を作って立ち上がった。
武器も捨てたし、私が彼らの敵ではないことは伝わったはずだ。さっさとここから立ち去って、ルサードを捜しに行こう。
しかし、二人の横をすり抜けて市場（バザール）に戻ろうとした私の手首を、後ろにいた優男が思い切り掴んできた。
「なんですか、突然」

「失礼。ついでに少々伺いたいことがあるのですが」
「……だからって、いきなり手首を掴むなんてひどいです。私は今、猫を捜していて急いでいますから、これで失礼します」
「猫ですか？　どんな？」
「毛が白くて……とても珍しい猫なので、見たら印象に残るかと」
私は二人と顔を合わせぬよう、地面に視線を落とした。
するとその刹那、瑠璃色の瞳の男があっと言う間に私の腕を引き、優男から引き離したかと思うと、私の体と腕を壁に押し付けて自由を奪う。
（――動きが速いわ！　一体この男、何者なの⁉）
彼はきっと、私が下を向いたことで、腰元に武器でも隠し持っていると勘違いしたのだ。自分が斬られる前に私の動きを封じようと動いたのだろう。
道で偶然鉢合わせただけの小娘をここまで警戒するとは、なんという見かけ倒し、臆病な男だろうか。
しかし、女戦士アディラの生まれ変わりであるこの私よりも素早い身のこなし。心は臆病でも、相当の手練れと見た。
男の瞳が、氷のように冷たく光り、真っすぐ私に刺さる。
「お前、何者だ？」

「ええっとですね。私は、その……」
「ナセルに近いこの街には、魔法を使える者もいるということか？」
「魔法、ですか？」
「お前のような小さな体で、あんな巨体の男を倒せるわけがない。魔法を使ったのか？　それとも魔道具か？」
「は？　一体何を仰ってるの？」
少々話が飛躍していて、頭の整理が追い付かない。
確かに隣国ナセルは魔法の国と言われてはいるが、私が人買い男をなぎ倒したのは、ただの実力だ。私はナセルの者ではないので魔法は使えないし、今は魔道具だって持っていない。
「私は魔法を使えません、魔道具もありません」
「それでは、お前がこの男を倒したことの説明がつかない」
「女神ハワリーン様のご加護かもしれませんね。このバラシュの地は、昔からハワリーン様のお膝元と言われておりますから」
腕も脚も壁に押し付けられて身動きが取れないまま、私は目の前の瑠璃色の瞳をじっと見た。
ターバンの隙間から覗く男の瞳は、異様な雰囲気を醸し出している。目の周りに刻

まれた深いクマのせいで、美しいはずの瑠璃色は随分とくすんで見えた。
（なんだろう、この瞳。すごく見覚えがあるような）
私たちは瞬きもせずお互いの動きを牽制しながら、至近距離でしばらく睨み合う。
（……と、それどころじゃなかった。このままじゃ、ルサードがますます遠くへ行ってしまうわ）
こんなところで、見知らぬ男と時間を無駄にしている場合ではない。
私は体を素早くねじって男の腕からすり抜けると、男の長衣の隙間から琥珀色の宝石のついた長剣を抜き取った。
シャン――と、長剣が空を切る音が路地の石壁に反射する。その短い音が鳴り終わる前に私は二人の足の間を通り抜け、彼らの背後に回った。
突然私が視界から消えたことに驚いた男たちには、一瞬の隙ができた。その隙に私は長剣を持ち直し、後ろから優男の背中に剣先を突きつける。
「ごめんなさい。急いでいますので、これで」
体に突き刺してはいないものの、私の持つ長剣の先は優男の長衣を裂いて背中に直接触れている。
優男が唾を飲む音が聞こえる。
「……お前、その長剣が使えるのか？」

優男の背中の向こうから、瑠璃色の瞳の男が驚いた表情で私を見つめている。
こんなに細くてか弱そうな外見をした私が、屈強な男を一撃で気絶させ、その上男性用の長剣を振り回しているのだ。驚くのは当然だろう。
確かにこの長剣は装飾がたくさん施されていて、武器として扱うには少々重たい。そんじょそこらの女性では、持ち上げることすら難しいはずだ。
私は長剣を男に向けて放り投げた。
「ごめんなさい。お返ししますね。どうかお二人とも気を悪くせず、バラシュを楽しんでください！」
二人に軽く手を振って、私は市場の方向に走る。
背後で男たちが私を呼び止める声が聞こえた気がしたが、振り返ることはしなかった。
路地を引き返して市場まで戻ってきても、やはりルサードの姿はどこにも見当たらない。露店と露店の隙間にまで目を凝らしながら、市場の人の流れの中を歩いてルサードの姿を捜す。
（ルサード、私に見つからないように逃げているわね）
先ほどの瑠璃色の瞳の男が言っていた通り、『剣の国』と言われる我がアザリムに

対し、隣国ナセルは『魔法の国』だと言われている。
　ナセルで生まれたルサードも、そのあたりにいる普通の猫とは違い、不思議な力を持っている。
　昼間はごく普通の白猫だ。
　しかし夜になって月を目にすると、ルサードは猫から獅子（ライオン）に姿を変える。その上、まるで神話に出てくる神のように、獅子（ライオン）に変化したルサードは人の言葉をも操ることができる。
　もしもどこかの盗賊がルサードを捕まえて売り飛ばそうとしようものなら、命の保証はない。
　もちろんルサードの命ではなく、盗賊のほうの。
　太陽はすでに傾きかけて、間もなく夕焼けが街を包むだろう。市場（バザール）の露店も店じまいの準備を始めている。
「あら、ハイヤートのお嬢様じゃないですか？」
　金物屋の店主の女性が、商品を片付けながら私の顔を覗きこんだ。
「え？　ごめんなさい、どなただったかしら」
「女神ハワリーンの生まれ変わり、リズワナ様ですよね？　やっと嫁ぎ先がお決まりになったとか。おめでとうございます！」

「嫁ぎ先？　私の？」
（……なんの話だったっけ）
「リズワナ様、嫁ぎ先が決まったんですか？」
「お相手は誰なんだい？　え、ナセルの隊商（キャラバン）の男だって？」
「随分と年が離れた男に嫁ぐんだねぇ」
「ちょっと家格が合わないんじゃないのかい」
　側にあった露店の女店主たちがわらわらと私の周りに集まってきて、次々に会話に参戦してくる。あっという間に私はおしゃべり好きの店主たちに周りを囲まれてしまった。
「奥様、嫁ぎ先とは一体なんのことでしょうか？」
「リズワナ様ったら！　まさかお聞きになっていないなんてことはないでしょう？　ジャマールとかいうナセルの商人が、リズワナ様を妻に迎えると言って、浮かれながら仕入れに出ていきましたよ」
「あっ、そうだったわ……！」
（しまった！　ルサードを捜すことに必死になって、ジャマールのことをすっかり忘れていた！）
　そう言えばお父様が、ジャマールに何か交換条件のようなものを出していた気がす

る。夕方までに何かを準備できたら、お代をもらわない代わりに私を娶りたい、とかなんとか言っていなかっただろうか。

彼がお父様の出した条件を満たさなければ、きっとこの縁談は立ち消えになる。なんとしても縁談は阻止したい。年の離れた男の四番目の妻になんて、絶対になりたくないんだから！

（昼間の二人の会話を思い出すのよ、リズワナ！）

「お父様とジャマールはなんと言っていたっけ……あっ、そうだわ！　魔法のランプ！」

（そうだそうだ、そうだった！）

お父様とジャマールの会話の内容を思い出し、私はパンと両手を合わせた。

確かジャマールは、『魔法のランプなんて手に入れられるわけがない』と、お父様にかけあっていた。お父様がジャマールに頼んだのは、ランプだ。しかも、ナセルとの交易でしか手に入らない、珍しい魔法のランプ。

「奥様！」

私は初めに声をかけてきた露店の店主の手を取る。

「ジャマール様は、魔法のランプを仕入れに行ったのですか？」

「ええ、昼すぎに仕入れに行くと言って出かけていくのを見ましたが……。魔法のラ

ンプなんて、一生に一度手に入るかどうかの代物です。見つかるわけがないよ！」

店主の女性はそう言ってガハハと笑った。

魔法のランプがなかなか見つからない品物だということは、私だってよく分かっている。問題は、その珍しいものを万が一ジャマールが手に入れてしまった時のことだ。

彼はランプを手に入れたら、直接その足でお父様のもとに向かうだろう。そのお父様は今頃皇子たちをお迎えするために、必死で宴の準備をしているはずで……

（とりあえず、私も皇子の宴とやらに向かわなきゃ！）

「ありがとうございます。私はちょっと体が弱くて、持病の物忘れでご迷惑をおかけしました。ゲホゲホ」

「いえいえ、リズワナ様ならもっといい相手がいらっしゃっただろうにねぇ……って、そんなこと言っては駄目だね。お幸せに！」

娘である私が、お父様が決めた縁談を断る立場にないことは分かっている。が、とにかく今回の結婚は、なんとしてでも避けたい。

私は店主たちに手を振ると、市場を後にしてお父様のもとに向かった。

◇

皇子の天幕は、バラシュの街の高台から見下ろせる場所に設けられていた。
万が一の刺客に備えて、背中側を崖に面した場所にしようと考えたのだろう。さすがにこの高さでは、崖の上からの奇襲は不可能だ。
（でも残念だったわね。こんな急な崖だって、私みたいに軽々降りられちゃう人もいるんだから）
天幕を挟んだ向こう側では皆が焚火を囲み、まさに宴が始まろうとしている。
料理や酒が次々に運ばれていく傍らには、着飾った女性たちが集まって、黄色い声で騒いでいた。これでもかというほど宝石をジャラジャラと身に付けたザハラお姉様の姿も見える。
「……さてと、お父様とジャマールはどこかしら」
忙しそうに行き来する人たちの中で、一層派手な服装をしたお父様の姿はすぐに見つかった。魔法のランプを手に入れられたら、ジャマールは真っ先にお父様のもとに向かうはずだ。しばらくこの場所から見張っていよう。
崖の端に腰かけて両足をゆらゆらと揺らしながら、私はジャマールの登場を待った。
（魔法のランプなんて見つからなければいいのに……）
そんな気持ちが頭の中でぐるぐると回る。
私はお姉様と違って、皇子に取り入って後宮に入りたいなんて、一度も考えたこと

がない。かと言って、年の離れたジャマールの四人目の妻になることだって、心の底から勘弁願いたい。
ハイヤート家の四人目の妻だったお母様が亡くなってからというもの、私には家族と呼べる人がいなくなった。
側にいるのは、私を商売道具としか考えていないお父様に、私を目の敵にするお姉様たちだけ。嫌な思いをさせようなんていう気持ちは微塵もないのに、私はお姉様たちにとって邪魔者でしかなかった。
無条件に愛し、愛される。お父様やお姉様たちとも、そんな関係の家族になりたかった。しかし四番目の妻が産んだ娘が「家族の一員に入れてほしい」と願うなんて、贅沢すぎるのだろうか？
前世で想い人から愛されなかった私は、「愛されたい」という気持ちが人一倍強いのかもしれない。
（アディラはナジル・サーダに愛されたかった。せっかく生まれ変わったのだから、今世こそ自分の恋を叶えたいと思っている。だけど……）
ナジル・サーダと再会して結ばれたいと願うアディラとしての私と、前世の恋に区切りをつけて、新たにリズワナとして生きたい私。
前世から数百年が経った今、私はこの相反する二つの気持ちを抱えて、どうしたい

のか自分でもよく分からなくなっている。
アディラ・シュルバジーとリズワナ・ハイヤート。
どちらも私であることには変わりないのに、二つの人格の感情が自分の中で次々と入れ替わる。
「……今そんなことを考えても仕方ないか。生まれ変わったナジルに、今世で会えるかどうかも分からないんだし」
いずれにしても、アディラにもリズワナにも共通しているのは、年の離れた相手の、しかも四番目の妻になんて、絶対になりたくないということだ。
私はため息をつきながら、ふと天幕のほうに視線を移した。
すると、何やら白い塊が素早い動きで疾走していくのが目に入る。茂みから飛び出してきたその塊は天幕の間をすり抜けて、一番崖側に近い大きな天幕に飛びこんでいく。
（今の白い塊！　あれってルサードじゃなかった⁉）
私は思わず立ち上がり、空を見上げた。
すでに夕刻。空には間もなく月が輝き始めるだろう。
（こんな人の多い場所で、ルサードが月を見たらどうなるかしら）
獅子の姿に変わったルサードを目にしたら、皇子もその従者たちも、きっと大騒ぎ

になるだろう。皇子を危険に晒した罪で、お父様の首だって一瞬のうちに飛ばされてしまう。
「もう！　だから今日は外に出ないほうがいいと言ったのよ！」
どこからか、風に乗ってシタールの響きが聴こえてきた。そろそろ宴が始まる。今のうちにルサードを連れて、急いでこの場を離れなければ。
（魔法のランプのことで頭がいっぱいだったのに、もうルサードったら！）
ルサードが駆けこんだ天幕を目がけて、私は崖の急斜面を伝って下りていった。

◇

「ルサード？　ここにいるのは分かっているのよ」
天幕の中にそっと忍びこんでみたのだが、そこには誰もおらず、静まりかえっている。耳に入るのは、遠くで奏でられるシタールの音色と人の笑い声だけだ。
狩りに来ているにしては豪華すぎる調度品の数々に、何度も目を奪われながら、私はキョロキョロとルサードの姿を捜す。
テーブルの上に置かれたランプのほのかな灯り、どこからか漂ってくるサンダルウッドのお香の匂い。

日が落ちた後のほの暗さのせいか、天幕の中は物憂げで気怠い雰囲気だ。
天幕の中央に敷かれた絨毯はまごうことなき一級品で、絨毯の表面を手のひらでそっと撫でると、最高の手触りにため息が出た。きっと身分の高い人のために、最高級の素材で作られたものだろう。
「この絨毯は一体どれくらいするのかしら。素材の染色、織り方の技術、模様の出し方……すべてが素晴らしいわ」
サンダルウッドの香りのせいでついつい力が抜けた私は、そのお高そうな絨毯の上に寝転んでみた。すると天幕の端に積み上げられた木箱の隙間から、ルサードのしっぽが覗いているのが見えた。
「そんなところにいたのね、ルサード。早く戻りましょう」
「……」
「ねえ、もう月が昇るわ。皆に見つかる前に行くわよ」
「……にゃぁ……ぁ」
絨毯の上を這うようにして木箱のほうに近付くが、眠くなってしまった様子のルサードは両目を閉じている。
早くここを出なければと分かっているのに、私のほうまでルサードにつられて眠気に襲われる。

重いまぶたをなんとか開きながら、手を伸ばし、ルサードのしっぽの先を掴んだ。

◇

「……プが……煙だ！　早く……火を消し止めろー！」
（……ん？　何？）
「……早く水を持ってこい！　殿下、危険ですから天幕の外へ！」
（危険？　水？　何かが燃えてるの？）
大声で騒ぐ人たちの声で、私は意識を取り戻して飛び起きた。ここはどこだったかと辺りを見回すが、目の前が真っ白なモヤで包まれていて身動きが取れない。
（何よ、この白いモヤは。まさか……煙!?）
自分がルサードを探して天幕の中に忍びこんだのだということを、ようやく思い出した。木箱の隙間に隠れていたルサードを見つけて、しっぽを掴んだところまでは覚えている。
まさか私は、あのままこんな場所で居眠りをしてしまったというのだろうか。
「殿下、早く外へ！」
「……いや、ランプが絨毯に落ちて燻っていただけだ。もういいから下がれ」

「しかし……！」
「早く行け！」
「ははあっ！　では、煙を出すために入口は開けておきますので……！」
「ああ、早く一人にしてくれ。お前たちがうるさくて休むこともできん」
煙の向こう側から聞こえた男たちの会話の内容から、私はよりにもよって、最も入ってはいけない天幕に入ってしまったのだと悟った。ここはきっと、このアザリムの皇子が使う天幕だ。
（やけに豪華な調度品や絨毯が置かれていると思ったわ。それにしても、なぜ私はこんなところで居眠りなんか……）
あっさり眠気に負けるなど、前世で最恐と呼ばれたアディラの名が廃る。情けない気持ちにとらわれたが、今はそんなことを考えている場合ではない。なんとかこの場を切り抜けなければ。
ここアザリムの皇帝の後宮には多くの妃がいて、皇子や皇女も多いと聞く。
悪名高い冷徹皇子アーキルを筆頭に、多くの皇女たち、そしてアーキルとは年の離れた弟の第二皇子。弟皇子の方はまだ五歳くらいだと聞いたことがある。
（だから煙の向こうにいるのは、冷徹皇子のアーキルね。背は高いし声は低いし、ものすごく不機嫌そうな話し方……）

白い煙の向こうから一歩一歩、皇子が私のいるほうに近付いてくる足音がする。
天幕の入口から差しこむ月の光に照らされて、皇子の姿は逆光で黒い影のように見えた。
その黒い影が、煙の出所、燻っていた絨毯に向けて何かをかぶせる。その辺りに落ちていた布で、火を消したのだろう。
天幕の入口から少しずつ煙が吐き出され、徐々に視界が開けた。このままいけば、私とルサードも皇子に見つかってしまう。
（相手が皇子でなければ一発お見舞いして気絶させた隙に逃げるんだけど。さすがに皇子には乱暴できないわ）
兵たちの首を斬って血の海を作ったという残虐な皇子に見つかるなんて、万事休すとしか言いようがない。とりあえず木箱の裏にでも身を隠そう。
煙を吸わないように両手で口を押さえ、その場で私は体を反転させた。すると私の足に、コツンと何かがぶつかった。
先ほどテーブルの上に置かれていたランプだ。
（ああ、ランプが絨毯の上に落ちて火が燃え移ったのね）
「……誰だ」
物音に気付いた皇子が、地を這うような低い声で呟く。

（しまった！　気付かれた！）
慌てて身を縮めてみたが、もう遅かった。皇子は扇で煙を仰ぎ、私の側に落ちていたランプを見つけて手で拾う。
扇の風に吹かれて煙が晴れ、皇子の顔が私の目の前にハッキリと現れた。
褐色の肌に、無造作にまとめられた黒髪。精悍な印象の顔の中で、くすんだ瑠璃色の瞳だけがギロリと異様に目立っている。
（この瑠璃色の瞳……市場で見た長衣の男と同じ色ね）
瞳に気を取られて油断した瞬間、私の頭上めがけて皇子の長剣が勢いよく振り下ろされる。
長剣に埋められた琥珀色の石を目印に、私は剣の動きを瞬時に読み取りながら体をねじって避けた。
「ひえっ、やめてください」
「何者だ。刺客か」
「違います、誤解なんです！」
宙に残った煙を斬るように、皇子はシャンシャンと音をさせながら長剣を振り回す。
さすがナセルとの戦いで活躍した皇子だけあって、剣筋は確かだ。
それでも、この元・最恐女戦士の私を斬ることは難しいと思うけれど。

皇子の剣を次々に避け続けていると、彼もこれは不毛な戦いだと察したのだろう。
腕をおろしてため息をつき、絨毯の上に長剣を投げ捨てた。
木箱の上に飛び乗って構えていた私と、再び真っすぐに視線が合う。
「お前は――」
瑠璃の瞳をさらに曇らせ、皇子は顔をしかめた。
「お前は、ランプの魔人なのか？」
「ラ、ランプの……え？　はあっ⁉」
思いも寄らない問いが飛んできた。
どこからどう見てもごく普通の人間である私に向かって、「ランプの魔人」呼ばわりだなんて。
ふざけて言っているのかとも思ったが、目の前の皇子の表情はいたって真面目だ。
「ランプの魔人って……私がですか？」
「宴の前に、商人ハイヤートが言っていた。俺のために世にも見事な贈り物を準備している、と。それがこのランプとお前のことか？」
先ほど拾ったランプを指差して、皇子は顎を上げ、偉そうに私を見下ろす。
どうやらこの冷徹皇子はなんの変哲もないただのランプを、魔法のランプだと勘違いしているらしい。

魔法のランプと言えば、ナセルに伝わる昔話に出てくる魔道具の一つ。
ランプをこすると煙と共に中から魔人が現れ、主人の願いを三つだけ叶えてくれると言われている。
とても珍しい魔道具で、一生に一度出会えたら奇跡という代物だ。
（やっぱりジャマールには本物の魔法のランプは準備できなかったみたいね。それはそれでよかったんだけど……）
なかなか問いに答えようとしない私に苛立った様子の皇子は、私を見下ろしたまま口元を引きつらせている。
確かに、ランプの火が燃え移った絨毯から煙が出ていたから、まるで私がその煙と共にランプの中から現れたように見えたかもしれない。
（でも、あれは魔人が現れた時の煙ではなくて、ただの火事ですから！）
「あの、私は決して魔人などではなく……」
「ハイヤートはなかなかの仕事をしてくれたようだ。まさかこの俺に偽物は寄越すまい。もしも偽物のランプを貢いだりしたら、おのれの首が一瞬で飛ぶことくらい、よく分かっているだろうから」
「はい、もちろん本物です！　私は正真正銘のランプの魔人ですっ！」
木箱から急いで下りると、私は皇子の前で丁寧に頭を下げた。

（咄嗟に嘘ついちゃった……）
皇子の天幕にこっそり忍びこんだ上にランプの魔人を名乗るなど、私はなんと馬鹿なことをしているのだろう。すぐに嘘だと見抜かれるに決まっているのに。
しかし、もしも皇子にランプが偽物だと知られたら、お父様の首が飛ぶだけではおさまらない。最悪の場合、ハイヤート家は一家もろとも処刑されてしまうかもしれない。
皇子が勝手に面倒な勘違いをしたくせに、なぜ私たちがこんな目にあわなければならないのだろうか。腹立たしくて、無理矢理ひねり出した笑顔もひくひくと引きつってしまう。
（今は何時ごろかしら。この上ルサードまで見つかってしまったら、大変なことになるわ）
「……にゃあん」
（ああ、ルサードのことを思い出した途端これだ）
背後から私を呼んだルサードの鳴き声に振り向こうとすると、皇子は私の腕を力いっぱい掴んで止めた。
「あれはなんだ」
「私の飼い猫でして……ちょっと手を放していただいても？」

「あれが猫なものか。見ろ」
「え？」
煙を吐き出すために天幕の入口が開いていたのが、私の運の尽きだった。
ルサードのいる角度からはちょうど今宵の明るい月が見える。白くて小さいはずのルサードの体は、みるみるうちに大きくなっていく。
白毛は月光を浴びて輝きながら長く伸び、獅子（ライオン）のたてがみに変わる。
十も数え終わらないうちに、ルサードはすっかりたくましい白獅子（ホワイトライオン）の姿に変身してしまった。
しかし皇子はルサードの姿に驚くこともなく、口の端を上げてニヤリと余裕の笑みをたたえる。
「なるほど。ランプの魔人は白獅子（ホワイトライオン）を操ると言われているからな」
「ああ……そ、そうですね。なにしろ私は本物のランプの魔人なので。白獅子（ホワイトライオン）を操るくらいお手の物です」
「ランプの魔人は、主人である俺の願いを三つ叶えてくれるんだろう？」
掴んだままの私の腕をぐいっと引かれ、鼻が触れるほどの至近距離に、皇子の顔が迫る。彼の冷たい瑠璃（るり）色の瞳の中に、私の姿が映しだされて揺れた。
「皇子様……」

「アーキルと呼べ。俺はアザリムの第一皇子、アーキル・アル＝ラシードだ」
「アーキル様、ですね」
「様もいらん、アーキルでいい。それで、お前の名は？」
「私はリズワナと申します。そっちにいる白獅子（ホワイトライオン）がルサードです」
「リズワナに、ルサードか。よく聞け、ランプの魔人リズワナよ。早速一つ目の願いだ」
アーキルはやっと私の腕を放したかと思うと、側にあった寝台の上に私を座らせた。そして長衣（カフタン）を脱いで椅子にかけ、同じ寝台に身を投げ出して寝そべる。
「魔人よ。俺の一つ目の願いは」
「……あの！　実は私、魔人の中でも新人でして……願いは三つではなく、一つのみでお願いできませんか？」
「話が違う。今すぐハイヤートを連れてこい。首をはねてやる」
「いやいや！　ごめんなさい！　願いは三つでいいです、頑張ります！」
（うう、上手くごまかせなかったわ）
どうやらこの男の願いとやらを三つ叶えるまで、私は彼から解放されないようだ。
地位も権力も財力もすべて手にしているアザリムの第一皇子が、一体私にどんな無茶な願いを吹っかけようというのだろう。

助けを求めてルサードに視線を送るが、獅子の姿になったルサードは、呑気に私の足元までやってきてあくびをするのみだ。

（……もう、ルサードの役立たず！　いいわ。とりあえずアーキルの願いを聞こうじゃないの）

半ば自暴自棄になった私は、寝転んでくつろぐアーキルのほうに向き直った。

「さあ、一つ目の願いをどうぞ！」

「俺は生まれてから今まで、まともに眠ったことがない。一度朝まで眠ってみたいのだ……お前にできるか？」

「え？」

（朝まで眠りたい……ですって？）

毎日部屋に引きこもって寝てばかりの私には、まったく理解できない願いだ。そもそも人は、眠らずに生きていられるものだろうか？

「眠らないまま、ずっとこれまで生きてきたのですか？」

「ああ、眠れないんだ。眠り薬を香に入れたところで、なんの役にも立たない」

（お香に眠れる薬を……？　ああ、だから私もルサードも、お香の匂いであっさり眠ってしまったのね）

皇子が眠れるように天幕に準備してあったお香の力に、まんまと私たちが引っか

かってしまったというわけだ。それさえなければ、きっと今頃ルサードを連れて屋敷に戻れていただろうに。

しかし今はそんなことよりも、皇子の体質のほうが本題だ。

「まったく眠れないなんて、私には想像がつきません。魔法や呪いの類でしょうか？」

「ああ。だからナセルの魔道具が頼みの綱だった」

アーキルは目を閉じ、寝台の上で足を組む。

私のことをランプの魔人だと勘違いしているからか、皇子という立場のくせに随分と気安い。初めて会う相手に簡単に自分の弱みを喋るなど、少々他人に気を許しすぎではないだろうか。

「……分かりました。上手くいくかどうかは分かりませんが、とりあえずやってみましょう」

「ほう、どうするのだ」

「まあ、お待ちください。ルサード、アーキルの枕になれるかしら？」

たてがみを撫でながら囁くと、ルサードはさも面倒くさそうに腰を上げる。私は寝台に敷布を広げ、ルサードをその上に座らせた。

そしてアーキルの腕を引き、ルサードのお腹が枕になるようにもう一度彼を横たわらせた。

「どうです？」
「うむ……毛が柔らかくて、悪くはない」
「でしょう？　ではもう一度目を瞑ってください。ルサードを枕にして、私が語る神話を聞いているうちに、きっとアーキルは眠ってしまうと思いますよ」
ランプの魔人であることを疑われないように、私は努めて堂々と背筋を伸ばして微笑んだ。
実を言うと、いつもルサードを枕にして眠っているのはこの私だ。フサフサで柔らかい白い毛に包まれながら、ルサードが語るアザリムの神話を聞いて、毎晩床についている。
魔法の国ナセルから来たルサードは、白獅子に姿を変えると、人の言葉を話せるようになる。彼の語る神話はとても耳ざわりがよくて、まるで子守歌のように私を夢の世界へと誘ってくれる。
そして何よりも、この白くてフワフワした毛に包まれていると癒されて自然と眠気に襲われるのだ。アーキルにもその心地よさを味わってもらおう。眠れないなんて言わせない。
「神話、か」
「ええ、アザリムとナセルがまだ一つの大国だった頃のお話をしましょう」

私がルサードのしっぽを撫でながらそう言うと、アーキルの表情がわずかに曇った。
「……アーキル、もしかして神話はお嫌いでしたか？」
「そんなことはない。神話というと、神だの悪魔だのが出てくるのか？」
「神は登場しますが……今日のお話に悪魔は出てこないですね」
（私のことをランプの魔人だと勘違いするだけあって、アーキルは魔人や悪魔がお好きみたい。おかしな趣味ね）
アーキルは「分かった」と頷くと、もう一度ルサードのお腹に頭をのせて目を閉じた。瑠璃色の瞳にばかり目がいって気付かなかったのだが、彼のまつ毛はとても長くて、目を閉じた姿はまるで神話に出てくる神のように美しい。
「……どうした？　早く始めてくれ」
「あっ、失礼しました。眠たくなったら何も言わず眠ってくださって大丈夫ですよ」
「もしも俺が眠れなかったら？」
「その時は責任を取って、私は魔法のランプの中に退散しますね」
「それは困る」
目を閉じたまま、アーキルは軽い笑みを浮かべた。
しかし、これから眠ろうかというのに、なぜかアーキルの笑みは引きつっていて、体にも力が入って強張っている。

まるで何かに怯えているようにも思えた。
（眠れるのかどうか、そんなに不安なのかしら……。でも大丈夫。ルサードの温かさと白毛に包まれて、眠くならない人なんていないはずよ）
アーキルにどんな呪いや魔法がかけられているのかは知らない。
でも、ルサードは魔法の国ナセルで生まれた不思議な力を持つ白獅子なのだ。ルサードの力があれば、アーキルを眠らせることくらい容易いはずだ。
そして、私が神話を語るのは、アーキルが眠れなかった時のための予防線。
気になる場面で語りをやめて、「続きはまた明日！」とでも言っておこう。そうすればアーキルは物語の先が気になって、簡単に私やお父様の命を奪えなくなるはずだ。
ルサードに目配せをして、私は口を開いた。

昔々、この場所にはアザルヤードという大きな国がありました。
北にはアザルヤード山脈、南にはナーサミーン山脈。ナーサミーンの山からは魔石がたくさん採れました。その魔石を使った魔道具は、アザルヤード全土に行き渡っていました。
ナーサミーン山脈のずっとずっと南にある海は、海神バハルによって治められていました。

海神バハルは陸に憧れていました。ナーサミーンの山々を眺めては、あの山の向こうには何があるのだろう、向こう側に行ってみたいとずっと考えていました。
そんな海神バハルの心につけこんだのが、風神のハヤルでした。
ハヤルも陸に憧れていましたが、いくら陸に向かって飛んでも、毎度ナーサミーンの山々に邪魔されて、山の向こう側に行けないのです。
『ナーサミーンの山々の向こう側には、きっと貴重な宝が眠っているに違いない。その宝を独り占めするために、ナーサミーンが我々の邪魔をしているのだ』
そう考えた風神ハヤルは、海神バハルに言いました。
『共に陸に上がり、ナーサミーンの山を崩して向こう側へ行こう』
海神バハルはその申し出を喜びました。一度でいいから陸に上がってみたいと、ずっと思っていたからです。しかし、バハルには心配の種もありました。
『ナーサミーンの山には、山神ルサドが住んでいると聞く。山を崩せば、ルサドの怒りを買うのではないだろうか』
しかし風神ハヤルはどうしても山の向こうの宝を手に入れたいと思っていましたから、必死で海神バハルを説得しました。
やがて根負けした海神バハルは、風神ハヤルと共に陸を攻め、ナーサミーンの山々を削ることに決めました。

立ち読みサンプル
はここまで